『海峡トンネル，すなわち英国の破滅』における誘導の手法の研究

深町　悟

英語英文學研究　第59巻（2015年３月）別刷

HIROSHIMA STUDIES
IN ENGLISH LANGUAGE AND LITERATURE

広島大学英文学会

『海峡トンネル，すなわち英国の破滅』における誘導の手法の研究

深町　悟

序

英国における「侵攻文学」（Invasion Literature）と呼ばれる作品群は1871年の『ドーキングの戦い』（*The Battle of Dorking*）に始まり第一次世界大戦まで流行したといわれる。[1] 第二次世界大戦中，英国軍の諜報部員として活躍したI. F. Clarkeがストラスクライド大学で英文学の教授として勤め始めたばかりの1966年に発表した『戦争を予期する声』（*Voices Prophesying War*）で『ドーキングの戦い』と，それを源流とする小説の流行を体系化して以降，多くの研究者がこのジャンルの小説を研究し，それは文学の範囲に留まらず，歴史学ではAsa Briggs，社会学ではDavid Finkelsteinなどが研究しており，また，変わったところではCIAの雑誌でも研究論文が掲載されている。[2] ところで，上述したクラークの著書では，書き手にとって『ドーキングの戦い』で使用された方法が有用であったことから，頻繁に利用されたとある。しかし，「侵攻文学」について年代を追って丁寧に書かれてあるこの本には，『ドーキングの戦い』以降1880年までの英国における作品の記述がほとんどない。[3] その時代については，作品は主にフランスの物を取り上げるが，英国の作品はわずかに『トルコの分割』（*The Curving of Turkey*, 1874）と『1883年の侵攻』（*The Invasion of 1883*, 1876）が

---

[1]『ドーキングの戦い』については拙論 “The Effects of Chesney’s Propaganda through *The Battle of Dorking in 1871*” *Phoenix* 73 (2013): 15–36を参照されたし。

[2] 例えばヴィクトリア朝期の歴史を研究するAsa Briggsは *The Battle of Dorking Controversy. A Collection of Pamphlets*（1972）を出版し，そのイントロダクションでこれらの作品が書かれた歴史的背景について述べている。David Finkelsteinは『ドーキングの戦い』を社会的事象として考察し，“From Textuality to Orality: The reception of *The Battle of Dorking*” という論文を *Books and Bibliography: Essays in Commemoration of Don McKenzie*（2003）の中で発表した。CIAの 雑誌 *Studies of Intelligence* で2010年に発表された論文では，このジャンルの代表的な作品，Erskin Childers, *The Riddle of the Sands*（1903）やWilliam Le Queux, *The Invasion* of 1910（1906）などについて第一次世界大戦前のスパイスリラーの流行として考察している。

[3] その時代において「侵攻文学」が不人気になった理由については，『ドーキングの戦い』への対抗プロパガンダの成功という視点から論じた拙論「ドーキングの戦いにおける4ヶ月の攻防」（近日発表予定）がある。

引用されているのみである。また，Cecil Ebyも，自身の著書『最終戦争への道』（*The Road to Armageddon*, 1987）において「紙上の侵攻」（“Paper Invasion”）と題し，英国の，このジャンルの作品について時系列的に論じているものの，1871年の『ドーキングの戦い』以後は約10年飛び1880年代の作品について論じている。最近の研究者ではA. Michael Matinが積極的にこの分野を研究しているが，やはり『ドーキングの戦い』を除く1870年代の作品に関しては，特に記述はされていない。1882年は英仏海峡の海底トンネルの計画について大きな議論を呼んだ「海峡トンネル危機」（Channel Tunnel crisis）で記念される年であり，『ドーキングの戦い』の手法を使った作品が多く出版され，『いかにジョン・ブルはロンドンを失ったか』（*How John Bull Lost London*）という人気作品も生まれた。また，その翌年以降もたくさんの作品が書かれ，人気作も多く生まれている。

出版のトレンドを見ていくと，『出版業者の回覧物』（*The Publishers' Circular*）では「ドーキング関連」（“Dorking Literature”）と別枠を組んで1871年だけで20タイトルの作品を紹介している。またクラークが*Voices*の巻末に「空想の戦争（1763–1990）」（“Imaginary Wars 1763–1990”）と題するチェックリストの1871年の欄には英国内のものだけで22タイトルあるが，それ以降1880年までのものはわずかに9タイトルである（外国の作品の翻訳は除く）。またEverett Bleilerの『S・F小説，初期の作品』（*Science-Fiction: The Early Years*, 1990）の中で「空想の戦争」（“Imaginary War”）とタグ付けされた作品の内，1871年に出版されたものは8タイトルであるのに対し，1872年から1880年までではわずかに2タイトルである。このような事実から，この期間の作品は伝統的に研究対象から漏れてきた，或は，あまり注意を向けられてこなかったのは合理的な判断によるものかもしれない。しかし，例えば1876年の『1883年の侵攻』は出版後，短い期間で10,000部売り上げたと新聞記事にあるように（“Exhibitions” 20），人気作品もあったと考えられることに加え，『ドーキングの戦い』から『いかにジョン・ブルはロンドンを失ったか』や『ロンドンの包囲』（*The Siege of London*, 1883）などの1880年代初頭の重要な作品に通じる過渡期の作品群として，その時代の作品は研究する価値があるとすることも合理的と考える余地はあるはずだ。本論文では，明らかに『ドーキングの戦い』を土台とした作品，つまり，作品発表当時の国内，国際情勢を基に未来をリアリスティックに描き，英国の軍事における不備から外敵に隙を突かれ侵攻されるという予測をプロットにしたもの6タイトルの内，1882年の「海峡トンネル危機」に先行した作品，『海峡トンネル，すなわち英国の破滅』（*The Channel Tunnel; Or, England's Ruin*, 1876）について，分析を試み，その意義について考察する。

I

この作品はCassandraという匿名で書かれており，作者は不明である。タイトルが表すように1882年に *The Times* などのマスメディアがキャンペーンを張り600名の政治家，宗教家，軍人，作家が団結して反対を表明した「海峡トンネル危機」の先駆けである。また，「侵攻文学」という枠でも唯一，1870年代に英仏の海峡トンネルを題材にした作品である。ここで，少し，「海峡トンネル危機」について整理したい。1856年にAimé Thomé de Gamondという技師がドーバー海峡を海底トンネルで繋ぐための予算を含めた具体的，技術的な可能性をナポレオンに示して以来，経済的な利点からフランスからの打診はあったものの，防衛面の不安により，英国での議論は何度も立ち消えとなっていた。その計画が現実味を帯び始めてきたのは，1876年に英仏共同の会社The Channel Tunnel Companyが英仏両海峡で試験的な掘削工事を始めたことである。当時のメディアの反応は技術面でのコメントに留まるなど，同会社が1882年に本格的に建設を始めた時と比べると，とても穏やかな論調であった。[4] 1882年の英仏海峡を題材にした英国のプロパガンダ小説の多くはフランスを仮想の敵として描いていた。フランスをトンネルで結ぶということは，海に囲まれ海軍力を主力とし，脆弱な陸軍力しか保持していなかった英国にとっては脅威となりえる。しかし，『海峡トンネル，すなわち英国の破滅』では，フランスではなくドイツによる英仏海峡トンネルを使った侵攻が描かれる。1870年に起こった普仏戦争は，フランスのあっけない敗北で1871年に終結し，ドイツ帝国が誕生した。『ドーキングの戦い』は，この強力なドイツによる圧倒的な英国への侵攻を描いているが，このテーマは『海峡トンネル，すなわち英国の破滅』でも引き継がれている。1870年代の英国民にとっ

[4] 1876年と1882年当時の海峡トンネル建設についてのメディアの反応は，例として *The Morning Post* と *The Pall Mall Gazette* から取りあげる。1876年の段階では“The Preliminary works in connection with the Channel tunnel have just commenced . . . . If . . . nothing occurs to show that the works are impracticable, the tunnel will be definitely commenced.” (“The Channel Tunnel” *Morning Post*)，あるいは，“the question will ever go so far as to render necessary the discussion of the mode of ventilation of the finished tunnel may well be thought problematical.” (“The Channel tunnel” *Pall Mall Gazette*) というように，建設に反対していなかった両新聞が1882年には，“There is no guarantee against the sudden appearance of ‘an ambitious conqueror under the lawyer-like exterior of an elected Minister or President;’ and even if there was no such cause for watchfulness and precaution it is unfair to expose our neighbours to ‘so tremendous a temptation’” (“The Proposed Channel Tunnel” *Morning Post*)，また，“if war did break out it is quite possible that the French might seize the English end of the Tunnel by a coup de main, or by treachery, or even by temporarily reducing pit Channel Squadron to decrepitude.” (“The Channel Tunnel” *Pall Mall Gazette*) というように，英国が侵攻される危険性について言及している。

ては，ドイツに敗れたフランスは恐れる相手ではなく，ドイツへの漠然とした恐怖の方が根強かったのではないかと考えられる。

この物語は９年後の1885年から始まる。当時のドイツ国民は普仏戦争から15年間の全く戦争のない中で，次第に軍の存在に疑問を持つ国民が増えていき，軍を否定する民衆の運動が活発になる。また，フランスでは1870年の戦争から立ち直るのに経済を優先し，国内の防衛は不十分なまま放置されていた。ドイツ皇帝は次のように考えた。平和主義が進んだドイツ国民も戦争による多額の賠償金から得られる繁栄に満足するだろう。そして，その豊かさをもたらす軍事力の必要性を認識し，軍を廃絶しようとする彼らの平和運動は骨抜きになるだろうと。そして，ドイツに一方的に有利な条約をフランスに申し入れ，それが受け入れられなかったことを口実にフランスへの侵攻を開始する。英国はこの仏独の開戦を受けて，すでに開通していた英仏海峡トンネルを閉じるということを国内で議論したが，安全よりもフランスへ物資を高値で売ろうという戦争特需を期待する声の方が大きく，トンネルは開けたままにしておくことになった。ドイツ軍は普仏戦争の時よりもより早く，正確に兵を進め，あっという間にパリを包囲しフランスはまたも敗北する。２億５千万ポンドの賠償金がドイツに支払われることが約束され，戦争は終結へと向かう。その後，ドイツ皇帝は戦争の勝利を祝い，ベルリンから海底トンネルのフランス側の入口であるカレーまでの旅行を希望する国民に無料で提供し，海底列車を使うロンドンへの旅行も勧める。英国はこの旅行者を歓迎するが，その一ヶ月後にドイツは英国が戦争中，食料を輸出することでフランスに協力したとして20万ポンドの賠償金を求める。英国は単なる経済活動だとして，その支払いには応じなかったが，それを口実にドイツは英国への侵攻を開始する。すると，すでにロンドンにいたドイツ人たちはすぐに海底トンネル経由の列車で武器を供給され，小規模の戦闘の後に，ドーバー側の海峡トンネルの入口を占拠する。英国軍は指揮系統の不手際から反撃が遅れる中，反対側のカレーからは武器と兵士が次々に送られ，ドイツ軍はドーバーで強力な軍の編成を続ける。すぐにドイツ軍の兵力は60,000人に達し，北上すると，カンタベリーで体勢を整えた英国軍との戦闘が始まる。英国軍は善戦するも，指揮系統の不備，砲弾や弾薬を削減していた政府の方針が仇となりドイツ軍を打破することが出来ない。また，英国海軍の隙をついて，敵の艦隊はグラスゴーに到達することに成功する。そのような中，スコットランドは船でロンドンへ援軍の派遣を試みるも，大半は到達することに失敗する。他にも鉄道網の不備をそのままにしていたため，他の地域からの兵士や補給が間に合わず，英国は本来の力を出すことがままならないまま，カンタベリーからも退き，ロンドンの南に防衛線を張り，守備を固めることになる。一方，ロンドン市内では，労働者階級の一部が暴徒となり，英国

人同士が戦わなければならない状況となってしまう。こうした中，最後の防衛線も簡単に破られてしまい，敵軍のロンドンへの道が開いてしまう。それには，指揮の判断ミスもあるが，一番責められるべきは政府であると著者は説く。つまり，経済活動を優先するあまり，最低限の国内防衛をおろそかにしたと訴えるのだ。武器の製造，輸送手段はもちろん，兵士の練度の低さも数日で解消出来るものではない。また通信網の守備も薄く，命令が遅れる決定的な原因になる。兵士の士気は高くとも，それだけでは戦えない。それでもロンドンへの侵攻を防ぐべく，最終手段として，英国の南と西をドイツに明け渡すことで敵の兵力を分散させようとする。平行して停戦交渉も試みるも，新たに作った防衛線の維持，敵軍の分散，交渉のすべてが不毛に終わる。国内世論も賠償金の支払いもやむなしという論調になり，その結果５億ポンドを支払うことで，決着をつける。開戦してからわずか半月で英国はここまで追いつめられるのである。こうしてドイツは，安全よりも経済を優先させていたフランスと英国から多額の賠償金を得ることに成功する。

この物語は数年先という近未来における英国への侵攻を詳細な描写で描くことで，物語が書かれた当時の国内防衛の不備を浮き彫りにする『ドーキングの戦い』の系譜を受け継ぐ作品である。適切な防衛政策がなされれば，将来の悲劇を防ぐことが出来るという警告を発し，その政策を推進しようとする明確な政治的意図をもったプロパガンダ小説であると考えられる。その意図とは国内の防衛費の増大である。タイトルになっている海峡トンネルに関しては，なぜか最も重要なテーマとはいえない。というのは，作品中，英国は海路からもグラスゴーが簡単に攻め入られる場面があるからである。つまり，トンネルは英国を侵攻させることにおいて必然とは言えないのである。しかし，防衛費さえ十分に使っていれば侵攻された後の英国の悲劇は防げたわけであるから，海峡トンネルの建設を拒むことではなく，陸軍の防衛費を増やすことが，敵軍の上陸は防げずとも，敗戦を防ぐことが出来る唯一の方法であり最も重要なテーマといえる。それを端的に表すシーンは作品中の重要な戦闘であるカンタベリーでの戦いである。その戦いで英国軍の敗退の決定的な理由となるものは 軍縮であると作者は語る。

> That gallant corps had been reduced to a minimum by an economical Government, which refused the proper number of horses, and could not enlist the proper number of men. (22)

ここで描写されるのはドイツ軍相手にまともに戦えない英国軍の能力である。「やりくり上手な」との皮肉を込めて語られる政府によって最小限にされた軍団が，

このような状況下では最小限をさらに下回る防衛力であるとの作者の主張は，進撃する敵軍に転進を余儀なくされる様子からも明らかである。ついにはロンドンを守る最後の防衛線が破られた時の，“a disgrace to the country [England] which preferred riches to honour” (36) は，富を重んじる姿勢に名誉を対比させ，時の政権を恥ずべきものだとの主張が，敗戦する結末に合わせ語られている。それ故，軍縮は危険であると同時に英国民の誇りも奪いかねないものだと，結論づけるよう読者を誘導する姿勢は明らかである。そして防衛費を縮小した英国が結果的に５億ポンドもの大金をドイツに支払うというシナリオは，軍事費を増大しなければいけないと読者に訴えている。しかし，その為の増税は，英国民にとって割に合わない保険代となる可能性が高く，また，軍事費の増大によって国家間の緊張を高める危険性もある。実際に国防を考える時は，侵攻される危険性を減らすために，様々な政策が試みられるべきであろう。確かに英国陸軍がドイツやロシアなどの他の列強に対して圧倒的に脆弱な戦力しか有していなかったことは事実であるにしても，この作品は当時世界一であった（Matikkala 25）英国の軍事費をさらに増大することが安全を得る方法であると主張する。この論争の余地の多い政治的主張を作者の一方的な視点で訴える点で，この作品は典型的なプロパガンダ小説であると考えられる。

Ⅱ

この『海峡トンネル，すなわち英国の破滅』は『ドーキングの戦い』と違い，一人称による物語進行はない。後者は主人公にボランティア隊員を用い，彼の視点による一人称の語りを徹底させることで，戦場において一市民の目から浮き彫りになる防衛の不備，迫り来る敵の恐怖などを読者に疑似体験させる効果があったが，前者は，英国への侵攻の前提条件としての独仏英を主にヨーロッパの状況，ドイツによるフランスへの侵攻をマクロ的に描き，英国への侵攻の様子などはマクロ的にもミクロ的にも描くという点で，後者と大きな違いがある。例えば，仏独の開戦に際して周辺国がとった対応は，以下の通りである。

> Austria said. ‘It is nothing to me;’ Italy said, ‘If Austria were not between, we might try our army;’ England thought she [England] was making too much money to interfere in anything continental; but the Muscovite looked over the border into Prussia, and thought that by helping France he might lay the springing at the throat of Germany. (7–8)

それぞれの国は擬人化され，マクロ的，かつ簡潔に周辺国の動向が描かれる。ま

た，オーストリアの「自分には関係ない」との発言から始まるこの箇所は，周辺国の利己的な姿勢を示すことから，その後に英国が単独でドイツと戦わなければならなくなることを仄めかす箇所とも言えるであろう。そして，フランスへの侵攻もとても簡潔である。それは，“The decisive battle occurred on the second [the 2nd of May], and was decided in favour of the Germans” (12) であり，重要な戦局の説明がマクロ的にたった一行で済まされる。しかも，日付を５月２日と特定することで，この戦闘を時系列的に位置付けし易くしていることから，英国が侵攻されるに至ることは単純な未来の事実だと読者に飲み込んでもらいたい意図を窺わせる。その一方で，英独の戦争では，海峡トンネルの出口で十分に準備を整えたドイツ軍が北上していくのを迎え撃つ英国軍が，指揮系統の効率の悪さから補給のために深夜まで足止めされ，ようやく食料を受け取る，というような詳細な描写が現れる。

> At 1 A. M. . . . a train came down loaded with live bullocks, sheep, pigs, and flour. The men could hardly eat raw meat; and uncooked flour the General, Lord Barnet, thought would not be a good thing to fight on. By 5 A. M., however, each man had eaten, and the soldiers sat growling over what most of them still considered a practical joke played by Government. (20–21)

時刻を特定し，出てくる生肉や調理していない小麦粉を食べざるを得ない兵士の状況を描くこの箇所は，深夜１時まで食事を摂れない中，ようやく届いた食料は食べられた物ではなく，それでも朝５時までかけて食した兵士達という描写である。このような場面は読者にも想像しやすく，同情を覚えやすい箇所であろう。その不満を抱かせやすい箇所で，すかさず政府というはけ口を与える。しかし，兵糧の準備のように，まずは軍の内部の責任と考えるのが普通だと思われる箇所であるにもかかわらず，「政府による悪ふざけ」と兵士を使い政府を非難させる。これには，とにかく政府を非難したいという作者の意図が表れているだろう。また，ここで登場する Lord Barnet という人物は，それ以降もミクロ的な視点で英国軍の状況を語る役割を担う。その一方で，大局的にも戦局は読者に語られる。例を挙げると，“The retreat from Canterbury had commenced on the 11th, and it was evident that no force could be assembled to prevent the enemy’s advance” (33) である。ここでは上述の，「やりくり上手な政府」によって最小限に抑えられた軍に関連して，「敵の進軍を防ぐための隊を集めることができない」と，間接的に政府を非難する箇所でもある。このように読者は，国際情勢と戦局の全体

像を把握しつつ，作者の指摘する具体的な問題点に着眼出来るはずである。

この作品は三人称の語りで書かれている。三人称を用いる利点として考えられるのは，作者の主張以外の箇所に向けられる読者の注意が最小限で済むのではないかということである。一人称で進行することで生じる語り手の人物設定などは排することができるし，読者の関心がその話者自身にも向くことを防ぐこともできる。そして，英国が破滅してゆく過程を詳細に描くことで作者の軍費増大の主張を他の箇所から際立たせることに有利に働くであろう。つまり，三人称の語りにより，作者の主張に関係ない箇所，例えば，仏独の戦争などについては，英国が破滅にいたる背景知識に留められ，それ以上の注意が向けられにくくされている。反面，その注意が向けられるべき箇所，主に英国が侵攻される場面は刻明に描かれている。しかも，そこでは，戦局の重要な場面で英国軍に不備が見つかり，読者の怒りが政府に向けられる。また，不備の指摘の後にはあわせて，その原因となる政策に言及し，作者の交戦的姿勢が明確に示される。それは例えば，勝たなければならないカンタベリーの戦いの直前では，まるで準備が追いついていない英国の状況が赤裸々に批判されている。

> Many started loaded with food, but no-ammunition; many discovered that their rifles were useless, when they were whirling south in the train. An economical Government had saved a few thousands by stopping the manufacture if what it considered too great a quantity of ammunition. (25)

ここでも「やりくり上手な」と政府を揶揄し，そのやりくりの結果が弾薬にすら事欠く英国軍であると，その原因を政府の軍縮政策に結びつける。同様に，ロンドンを守る最後の防衛線が突破された時には，次のように，軍の作戦よりも政府の政策の失敗が敗戦の原因ではないかと読者に問いかける。

> There was no time for the countermarch of the right . . . . Some critics say the General commanding the right wing was to blame; but is that Government not more to blame which reduced the cavalry to numbers so small that no scouting could be possibly carried on? (36)

他の箇所と違い，「一部の批評家は・・・」から始まる説明で異なる意見を含ませる。しかし，これは見せかけの対立意見でしかない。すぐに政府に責任があると根拠を付けて訴えかけることで，筆者は，何もかもを政府に責任ありとする姿勢に対する読者の疑念をかわしているのである。また，当時列強で最強だったド

イツ陸軍を前に，政策の悪さゆえに本来出せるはずの力をまるで発揮出来ないというところで，英国人のプライドを傷つけることなく，英国の惨めな敗北を描くことに成功しているようである。

政府の政策を原因とする失敗に次ぐ失敗を描き，それによって苦しむ英国兵やロンドン市民が登場するが，その悲劇が起こらないために何をすべきか，ということを作者は直接には明言しない。基本的には原因と悪い結果を明示することで読者に悟らせるという手法である。上の２つの引用も然り，以下の引用もその一例である。

> The cavalry from Canterbury arrived about midnight, and they, too, tried to gain the mouth of the pit . . . and at last horse and foot gave up the hopeless attempts, and lay down to curse the money-making country that had brought this misfortune upon them. (20)

ここに出てくる騎馬隊もドイツ軍相手になす術がなく，その状況で「やりくり上手な」という表現よりもあからさまに，英国を「金儲けに走る国」と彼らに非難させる。これらの描写は，登場人物の強い不満や彼らが窮地に立たされる姿で，悲劇を防ぐ手だての暗喩に留まる。問題について,「何を考えろ」「どう解決しろ」と訴えるよりも，語り手が選択した限定的な情報を与えることで，受け手はその情報から自発的に考え，結果，語り手の望む行動を取りやすい「議題設定」という手法がある。この作品においては，この手法が多用され，限定された情報というのは，政府の方針がことごとく裏目に出てしまい，ドイツの手に落ちるというという架空の物語であり，その情報を真に受けて判断するならば導かれるのは，その方針の転換を支持するという結論である。また，その「議題設定」を何度も出すことで，当時の防衛政策は悪しきものであるとの反復による刷り込みの効果も期待できるだろう。

このように，この作品は英国の破滅を描写することで読者の感情に直接訴えかける。その破滅とは，ロンドンへ進軍していくドイツ軍からもたらされるものだけではなく，内側からの崩壊でもある。ロンドンでは混乱に乗じた貧困層の市民が悪事を尽くす箇所が出てくる。それは，“From east to west came this tide of villainy, and bloodshed, robbery, rape, and arson marked the track it left . . . . Between Oxford Street and the river fire after fire sprang up.” (28–9) である。ここでは, 読者の多くが思い描くことができるであろう, ロンドンのオクスフォード通り辺りが同胞によって破壊される描写で，読者の怒りに火を注ごうとする箇所だろう。その一方，絶望的な状況で外敵が迫ってくるという場面は，“The

Germans, in the meantime, were pressing on, surely, steadily, and quickly to the doomed city." (32) と，恐怖心を読者に喚起するような描かれ方がされる。また，物語の開始は1885年３月２日 (1) とし，ドイツが英国に侵攻を始めたのは６月９日 (17)，敗戦したのは６月24日 (37) という風に時間を指定し，物語は進む。この作品が1876年に出版されたことから，時間設定は９年から10年後の近い未来であり，外敵の侵攻という恐怖心に加え，破滅までの短いタイムリミットを与えることで読者の客観的な思考と判断力を鈍らせ，作品自体に緊張感を与えている。

ところで，*The Times* の戦争特派員 William Russell はクリミア戦争で兵士の日常を伝え，彼らの待遇の改善に大きく寄与した。彼は読者の同情を煽ることで，効果的な記事を書くことが出来たが，それは Charles Dickens が社会の最階層にいる子供達などを描き，同情心を用いたことと本質的に同じである。一方で，「侵攻文学」と呼ばれる作品群は要求を通すためのデバイスとして読者の同情心ではなく主に恐怖心を用いる。この作者が敵国の設定でドイツを選んだことは，普仏戦争の恐怖の残り火がまだあったかもしれない1876年当時では良い判断だったのかもしれない。侵攻の結末は "the German Emperor assembled his generals in the Halls of Westminster to receive their congratulations of the success of his enterprise" (37) で，ビッグ・ベンが併設されるロンドンで最も格式の高い建物，ウェストミンスター宮殿でドイツは勝利を祝うが，これは1871年に Wilhelm １世が占領中のパリ，ヴェルサイユ宮殿でドイツ帝国の建国を宣言した事実を想起させるし，ドイツ軍の用意周到さや，スピーディーな侵攻は，普仏戦争のそれと相似している。そして，このイメージの利用は1876年当時の読者のドイツが脅威であるという信念を新たにし，強める効果が期待できるだろう。現代のプロパガンダ研究でも，受け手の信念を変えることよりも，その信念を強化したり，土台として使って新たな信念を植え付けたりする方が効果的であるとされる。それを考えると，この敵国設定はセオリー通りである。つまり，海峡トンネルを題材に英国への侵攻を描くならば，対岸の入り口があるフランスを敵国として選ぶ方がプロットとして自然であるが，ドイツを敵国に選ぶ方が，フランスよりもドイツの方が脅威であるという受け手の信念を利用でき，その上に英国の防衛力は不十分であるという信念を与えやすい。さらに，作者は近未来の侵攻劇というフィクションで主張を行っているため，反駁の危険を出来るだけ冒さないように心がけたに違いない。もちろん，反駁されたとしても，将来に侵攻される可能性がゼロであるということは誰にも言えず，それを試みることは悪魔の証明であり，不毛といえる。それ故，もしも読者にこの作品を起こりえる未来の出来事だと感情的に信じさせることに成功すれば，その読者を論理的にそんなことは起こりえないと説得する試みはほとんど生産的でなくなる。同時に，そのように信じさせる

ということは，作品の主張に注意を払うことでその読者自身の生命や財産への危機を少なくすることにも繋がる。そこで作者と読者は利害が一致し，作品は好意的に読まれ，大げさな表現や，少しのプロットの矛盾なども，大義の為に大目に見られるだろう。しかしながら，この作品ではそうした感情的高まりを十分に活かして，作者の信念に読者を共感させているとは言いがたい。というのも，感情的高まりを導くにも，論理的正しさは要求されるのだが，英国が侵攻されるという出来事には，それを許さない論理的矛盾が多すぎるからである。

Ⅲ

この作品は，当時の，または後のメディアに取り上げられることは全くなかった。まるで話題にならなかった作品であるのは，上述の数々のプロパガンダ的工夫が無為に終わったことを示している。ドイツによる侵攻が近い将来に起こり得るものだと信じさせ，侵攻される過程を通じ読者にその恐怖の疑似体験をさせた上，その体験の中に悪い未来を回避できるヒントを織り交ぜるという作品の構成は，ドイツ軍が当時ヨーロッパ最強の陸軍力と言われたことを考えれば，不自然ではない。しかし，その前の段階である近い将来に侵攻されるという設定にはかなり無理がある。例えば，ドイツとフランスが開戦する過程を見てみよう。物語の始めでドイツ政府にとって不利である軍を撤廃する運動が起き，ドイツ皇帝はその運動を抑えるためにフランスと五分五分の軍縮を国民に約束する。

> You know that again a Napoleon is on the throne of our enemies, and think you that he will desist from an attack on our country when our army is no more?
> (A shout from the crowd: 'The army is too large.')
> But now, my children, I will make you a promise. If Napoleon will reduce his army, the German army will be reduced accordingly; does that satisfy you? (6)

ここに出てくるナポレオンとは普仏戦争の結果，追放されたナポレオン三世の息子であろう。1879年に死亡し，実際に政権につくことはなかったが，ナポレオンという名と，1870年の普仏戦争開戦当時の状況を思い出させることで，作者は読者の記憶を利用し，危機感を実感させようとしたのだろう。「大きすぎる軍隊だ」と叫ぶ群衆にドイツ皇帝は「子供達よ」と自身の野心や狡猾さを隠し国民を軍縮の提案をして優しく諭しているが，ドイツと同じように軍縮をするということはフランスにとっては厳しすぎるものであった。なぜならフランス軍の戦力は

“already too small for the nation’s possible need” (6) であり軍縮の余地がなかったからである。しかし，その提案が受け入れられなかったことに対しドイツ国民は “had been led to believe that France had insulted the Fatherland” (6) ということから開戦の機運が一気に高まるのである。もし，フランスはすでに必要最低限以下の兵力しか有していなかったと，一行で済む情報がドイツ国民に届き，そして広まっていれば，彼らが盲目的にフランスを悪者とし，敵意を募らせることはなかったであろう。ドイツ政府はこの情報戦に成功するために，フランスからの情報を遮断することはもちろん，国内のこのような情報の流通も止める必要が出てくる。ところが，その両方に成功し，どうやってそれを成したかは都合良く一切語られない。しかも，このために，ドイツ政府は国民に対し情報を独占していなければならないが，そもそも軍の撤廃運動が生じたことは，ドイツ国内の情報の流通に一定の自由度があったということで，事態に矛盾が生じ，読者のスムーズな理解の障害となっている。

さらに，フランス皇帝が軍事よりも経済の知識があったと前書きした上で，“as he and his generals summed up the total of their forces, they saw how almost hopeless a war with the Germans would be” (7) と，フランス側は戦争が始まって初めて，自国の戦力を計算する。ドイツ同様，フランスも互いの軍事力については事前に把握しているのが当然であり，こうしたフランスの愚かさを強調する描写は，あまりに不自然で受け入れがたい。開戦したあとで，周辺国の反応は “Europe gazed in stupid wonder at the suddenness of hostilities, and no cabinet but blamed the rashness of France” (7) だったため，フランスへの協力国は現れない。しかし，メディアもあり，鎖国もしていない周辺国が開戦の理由にまるで無知でいるということも都合の良すぎる設定であり，疑問が生じる箇所でもある。それだけでなく，それらの国々は，ドイツがフランスに要求した２億５千万ポンドもの賠償金の不条理さに気付かず，ドイツが主張する通りに，“the demand not excessive” (14) と考える。英国も同じようにドイツの野心には一貫して無知で，海峡トンネルを使ってドイツ人旅行者が大挙して押し寄せて来たときのメディアの反応も，きわめて肯定的に描写される。

> There was a breath of suspicion here and there in a few journals, but the leading one blamed those who cast a slur on “the greatest kindness ever done to a people by a [the German] government,” and showed how travel would open up “the great mind of a nation [Germany] whose only fault was an exaggerated study of details in its philosophy.” (16)

「わずかな疑いが散見された」と言及することで，事態に真実味をもたらそうとしているのかもしれないが，この英国メディアの反応は，英国の読者が真面目に受け止めるには，あまりに軽薄すぎる。結局，英国人がドイツに危機感を募らせるのは，６月９日の *The Times* に “Germany demands from England the sum of 200,000*l*., that being the estimated loss sustained on account of supplies to France during the war” (18) なる記事が掲載され賠償金を求められているのが明らかになってからである。その時の様子は “A shiver passed through the island from sought to north, and mass meetings of people were held” (18) と，英国中が震撼するほどであるが，このような反応もまた，英国民がドイツの野心にまるで無知であったことを表し，英国人のナイーブさを強調しすぎて，信じがたいものにしている。

このように作者はドイツが有利にフランスと英国に侵攻できるようにする工夫を凝らしているものの，あまりに無理が多い。そして，ドイツが英国を侵攻するというプロットが，多くの論理的な矛盾を引き起こしているにも関わらず，それが作者によって提案できる最も現実的なシナリオであるならば，逆説的に，英国はドイツに対し安全であると作者自身が認めているようなものである。それ故に，ドイツの脅威を使い英国の読者を煽動しようとする試みが失敗するのは当然だったのである。

結

この作品は効果的なプロパガンダの手法がいくつも織り交ぜられているにもかかわらず，世間から注目を浴びることは全くなかった。原因は，上述した開戦に至る経緯のように論理的な無理があるからである。しかし，こうした設定の無理は1871年の普仏戦争直後や1882年の「海峡トンネル危機」と違い，英国内で侵攻されることへの危機感が薄かった1876年という時期に海峡トンネルの危険性を描こうとしたためでもある。1871年の『ドーキングの戦い』は，ドイツに対する国民的危機感の高まりを上手く捉えていた。また，それは，Edward Cardwell が，英国軍の大幅な改革を進めた Army Reform Bill も積極的に議論されていた時期の発表でもあった。しかし，『海峡トンネル，すなわち英国の破滅』は，トンネルの建設もまだ始まっておらず，新たな論争を巻き起こす緊急性も，利用できる世論の高まりも，欠けていたため，侵攻されることを前提とした作品の真実性には根本的な無理があったといえる。

この作品の出来を考えると，この作品が海峡トンネル反対のキャンペーンに強い影響を与えたということは考えにくいものの，この作品の意義も指摘したい。1882年に *The Times* や *The Nineteenth Century* がすでに本格的な建設が始まっ

ていた英仏海峡トンネルに反対する猛烈なキャンペーンを行ったが，『海峡トンネル，すなわち英国の破滅』がそれより６年も前に侵攻の危険性を指摘したことは特筆すべきである。作品が出版された同じ年の1876年に試験的な掘削工事が始まるが，その頃に侵攻の危機を唱えるものは少なく，作品中でメディアの良心として扱われる *The Pall Mall Gazette* でさえ，建設に反対する姿勢は示さず，トンネル内の換気の問題等，技術的な面に言及するのみだった。また，1870年代の「侵攻文学」でも，海峡トンネルを題材にしたものは『海峡トンネル，すなわち英国の破滅』を除き，皆無である。その後の1882年から1883年の間にそれを題材に扱った作品が10タイトル以上登場したことを考えると，この作品は先駆的であり，評価されるべき作品である。また，英国に侵攻するにあたり，多くのドイツ人旅行者にその始めの役割を担わせたことも斬新である。しかもこの設定は，1882年の『いかにジョン・ブルはロンドンを失ったか』でも，ドーバー側のトンネルが，まず旅行者に扮したフランス人達の手に落ち，英国はそれを奪回できないまま，フランスは侵攻出来るほどの準備を整えるという展開で用いられており，プロット自体には捨てがたいものがあったに違いない。また，英国内にいるドイツ国籍の民間人が戦力となるという手法は，のちに「侵攻文学」で商業的に最も成功した William Le Queux が好んだ手法であった。少なくとも，後の作品の重要なテーマとなったもの，即ち，海峡トンネルと英国にいる外国人旅行者などの非戦闘員が軍事的役割を担うという設定を，この作品は２つも有しているのである。

日本学術振興会特別研究員

参考文献

Bleiler, Everett Franklin. *Science-Fiction, the Early Years*. Kent, US: Kent State UP, 1990. Print.

Cassandra, *The Channel Tunnel; Or England's Ruin*. London: WM. Clowes and Son, 1876. Print.

"The Channel Tunnel" *Morning Post* 2 June 1876: 7. *British Newspapers, British Library*. Web. 8 Aug. 2014.

"The Channel Tunnel" *Pall Mall Gazette* 23 March 1876: 10. *British Newspapers, British Library*. Web. 8 Aug. 2014.

"The Channel Tunnel" *Pall Mall Gazette* 14 Oct 1882: 1. *British Newspapers, British Library*. Web. 8 Aug. 2014.

[Chesney, George Tomkyns], "The Battle of Dorking: Reminiscences of a Volunteer." *Blackwoods Edinburgh Magazine* 109. 667 (1871): 539–72. London:

William Blackwood and Sons, Edinburgh. Print.

Chesney, George Tomkyns et al., *The battle of Dorking controversy: a collection of pamphlets*. Ed. Asa Briggs. London: Cornmarkets Reprints, 1972. Print.

Clarke, I. F. *Voices Prophesying War 1763–1984*. London: Oxford UP, 1966. Print.

Eby, Cecil Degrotte. *The Road to Armageddon: The Martial Spirit in English Popular Literature, 1870–1914*. Durham: Duke UP, 1987. Print.

"Exhibitions" *Manufacturer and Inventor* [London] 15 Aug 1888: 20. *Newspaper Archive*. Web. 15 Sep. 2014.

Finkelstein, David. "From Textuality to Orality: The reception of *The Battle of Dorking*." *Books and Bibliography: Essays in Commemoration of Don McKenzie*. Ed. John Thomson. Wellington: Victoria UP, 2002. 87–102. Print.

Grip. *How John Bull Lost London; Or, the Capture of the Channel Tunnel*. London: Sampson Low, 1882. *The Internert Archive*. Web. 20 Sep. 2013.

The Invasion of 1883: A Chapter from the Book of Fate. Glasgow: James Maclehose, 1876. Print.

Macaulay, Clarendon. *The Curving of Turkey: A Chapter of European History*. London: Mead and Co, 1894. Print.

Matikkala, Mira. *Empire and Imperial Ambition: Liberty, Englishness and Anti-Imperialism in Late Victorian Britain*. London: I. B. Tauris, 2011. Print.

Moran R., Christopher and Robert Johnson "In the Service of Empire: Imperialism and the British Spy Thriller, 1901–1914." *Studies in Intelligence* 54.2 (2010): 1–22. *Central Intelligence Agency*. Web. 10 Mar. 2012.

Posteritas. *The Siege of London*. London: Wyman & Son, 1885. *The Internert Archive*. Web. 20 Sep. 2013.

"The Proposed Channel Tunnel" *Morning Post* 30 Jan 1882: 6. *British Newspapers, British Library*. Web. 8 Aug. 2014.

The Publishers' Circular. Ed. Sampson Low. vol. 34. London: Publishers' Circular, 1872. Print.

The Channel Tunnel; or, England's Ruin: A Study of its Techniques of Persuasion

Satoru Fukamachi

It has been said that the sub-genre of Science Fiction called Invasion Literature was popular from 1871 through the outbreak of World War I in Britain. However, from 1872 to 1881, there was a significant decline in this trend. During these ten years, fewer than ten titles were published while more than 20 stories had appeared in 1871, and the stories in that decade have been almost completely ignored by the scholars of this genre. This history might imply the fruitlessness of studying Invasion Literature in that era; however, in order to clarify how the genre had developed, breaking this tradition might yield some fruitful results.

One of these stories is *The Channel Tunnel; or, England's ruin* (1876) written by an anonymous author using a pseudonym, Cassandra. In the story, a German Emperor cunningly plans an invasion of France and England in 1885, and implements the plan accordingly. The war between Germany and France is a synonym of the actual war, the Franco-Prussian War in 1870, and after defeating France, the Emperor encourages his subjects to travel to England through newly constructed submarine tunnel under the English Channel. When the number of the German travelers is at its highest, England is led to declare war against Germany. The war only lasts about a month; England is quickly defeated and consents to paying an incredibly high indemnity.

This story can be regarded as a propagandistic work advocating the reinforcement of national defence, and therefore the increase of the military budget. While the author describes the unstoppable enemy forces proceeding to London, he also tells how the English "Economical Government" has made the English army too weak for the demands it might face. The author does not tell the readers what to do clearly; instead of this, he shows them what to think about. The characteristics of the persuasive techniques of this story can be summarized as the selected agenda settings, the limited time setting, and the description of situations arousing fear or anger.

This tale contains carefully calculated layers of propagandistic methods.

However, it failed to draw public attention. The main reason probably lies in its illogical plot in which ambitious Germany deceives surrounding nations including England, and the Germans successfully land on English soil without any hindrance. However, in contrast with the case of *The Battle of Dorking* (1871), it might have been impossible for an anonymous author to influence the reading public with an invasion story when there was no public mood of alarm to employ.

Although this tale was commercially unsuccessful, it is the earliest example of Invasion Literature that employs the idea of the Channel Tunnel. In 1882, when an actual (though never completed) tunnel under the English Channel was being constructed, more than 600 English public figures, including Lord Alfred Tennyson, signed a petition opposing the construction, in response to the campaign started by a leading journal, *The Nineteenth Century*. Accordingly, it became highly popular to write invasion stories using the Channel Tunnel as a gateway for invading forces. When *The Channel Tunnel* was published, the English held somewhat neutral opinions about the tunnel, and this was also true of the *Pall Mall Gazette*, which the author, Cassandra, expressed high regard for in the story. In that moderate public mood, the alarming story of *The Channel Tunnel* had appeared, including some remarkably original features. Perhaps, it was published too early.

Apart from that theme, *The Channel Tunnel* also contains an important device; foreign travellers in England turn out to be enemy soldiers or able assistants of an invading force. In the 1890s and the early 20th century, the foreigners in England as a national threat became a typical scenario in Invasion Literature. The most eminent writer using this theme is William Le Queux. He even encouraged the public to report to him if they saw a suspicious foreigner in England by promising them a monetary reward. Hence, *The Channel Tunnel*, even though a minor work of Invasion Literature, pioneers the use of two important themes.

Research Fellow of the Japan Society for the Promotion of Science